

ベイジークラスの耕地内栽培利用法

徳永初彦・茨木和典・小山信明 (九州農業試験場)

TOKUNAGA, H., K. IBARAKI and N. KOYAMA: A Cultivation Method of Vasey Grass, *Paspalum urvillei* Steud., on Arable Land

最近、粗飼料生産の向上を図るため、収量性の高い立性大型多年生暖地型牧草ベイジークラス (V) が各方面から注目を集めている。

筆者らはこの草種を耕地内で栽培利用する方法を検討し、すでに1979年にはイタリアンライグラス (IR) との交互畦栽培によって越冬株率を高め、初年度から極めて高い収量をあげ、この利用法がすぐれていることを報告した。

本報では V と IR との組合せ体系におけるそれら草種の3年間の収量推移と、Vの刈取り時期及び刈取り時の車輪圧の影響について報告する。

1. 試験方法

Vを1977年9月9日、20、30、40、50、60cmの間隔に条播し、同年10月17日 IR を交互畦栽培した。2年め以降はVを10月上～下旬に最終刈りした後、IR を不耕起追播 (散播) した。播種量は V 1.5kg, IR 2.5kg/10a (2年以降5.0kg) で、施肥量は基肥に窒素10、リン酸25、加里10kg/10a、追肥として刈取り後窒素、加里各7kg/10a 施用した。出穂始期に約7cmの高さで刈取った。なお、刈取り時期試験では第1表に示す時期に刈取り、車輪圧試験では13馬力の小型トラクター (荷重 560kg) を刈取り後1～4回走行させ踏圧区と比較した。

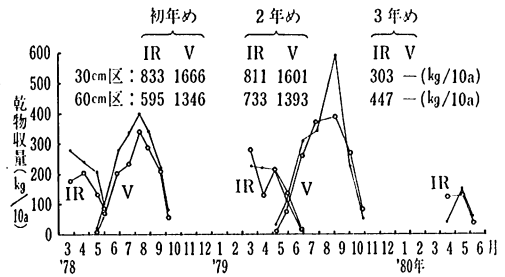
第1表 刈取ステージの違いと収量性 (1979)

刈取りステージ	草丈 (cm)	乾物重 (kg/10a)	葉重歩合 (%)	CGR (g/m ² /日)	刈取り回数(m)
穂ばらみ期	95	1,700	57	10	5
出穂始	96	1,500	59	8	5
出穂期	106	1,600	48	9	4
穂揃期	149	3,100	41	17	3

注) 穂ばらみ期: 出穂直前, 出穂始: 出穂を始めた日, 出穂期: 50%程度出穂, 穂揃期: 80%程度出穂, 穂ばらみ期: 粗蛋白質12%, 水溶性炭水化物2.5%

2. 試験結果と考察

1) 乾物収量の推移: 初年めの3月24日 IR を刈取ってから3年めの IR を6月3日最終刈りするまでの期間に22回刈取りを行った。その間の草種別収量の推移を代



第1図 ベイジークラスとイタリアンライグラス体系における収量の推移

注) V: ベイジークラス, IR: イタリアンライグラス・条間 30cm 区, ◦ 条間 60cm 区

表的なものについて第1図にしめした。2年めまで両草種とも順調に生育し、植生も問題なく交替し高い収量 (年間乾物収量約2.5t/10a) をあげた。しかし、3年めに追播した IR は V の条密度に関係なく定着、生育とも極めて悪く、収量が前年より50%程度低下した。この原因が貯蔵物質不足、根部伸長不良によるのか不明であるが、障害除去のため検討を要する。又、V株が3年めに越冬せず収穫皆無となったが、この原因は他の試験からみて、最終刈取りのおくれ (10月下旬) と低刈りによるものと考えられ、したがって、Vの栽培に当っては高刈りして、9月下旬までに刈終ることが必要であろう。

2) ベイジークラスの刈取り時期: 第1表に示すとおり、刈取り後の再生、草質、収量等からみて、いずれも穂ばらみ期刈りがまさり最適と考えられる。

3) 車輪圧の程度と収量: 刈取り収穫時の車輪圧の影響は大きく、踏圧に比較し車輪圧1回で19%、4回で27%減収した。

以上、Vの刈取り適期は穂ばらみ期であること、収穫時の車輪圧の影響が大きく、著しく減収すること、耕地内において V と IR との不耕起連続栽培が可能で、この体系で高収量を得ることを明らかにした。しかし、3年めに至りVが越冬困難になること、追播 IR の生育が著しく不良となり減収することは、今後の重要な検討課題として残された。